

デーリー東北
2020年(令和2年)7月10日(金曜日)(24)

大工大 検体採取ボックス製作

コロナ検査 医師の安全確保

新型コロナウイルス収束の見通しが立たない中、八戸工業大(坂本 禎智学長)は第二種感染症指定医療機関の八戸市立市民病院(今明秀 院長)と連携して、PCR検査用の検体採取の際に医師の安全を確保する「検体採取ボックス」を独自に開発した。市販品に比べて軽量化を図ったほか、パネルにアルコール消毒ができる塩化ビニール製を採用したのが特徴。ボックスは来週にも同病院に搬入される予定。

(三浦千尋)

市民病院と連携

るインフルエンザとの同時発生に対応するため、診療所での導入も視野に入れ、

さらなる軽量化やコストダウンなど改良を図る。開発に参加した機械工学科4年の田代祐葵奈さん(21)は「順序立てて組み立てるなど勉強になったことが多く、貴重な経験になった」と充実感をにじませた。浅川准教授は「材料はどれも八戸の製作所が手掛けた『メイド・イン・八戸』で、性能もどこにも負けない」と自信を見せた。

ボックスは、同大の機械工学科と工作技術センターが中心となり製作。土木建築工学科が空調シミュレーションを実施し、生命環境

科学科が清潔空間指導を行なうなど、各分野の教員や学生が開発に参加した。パネルの素材などについて、同病院の医師らの意見



PCR検体採取ボックスを活用したデモンストラクションの様子。9日、八戸工業大

を取り入れながら、約1カ月かけて製作・開発。大きさは縦、横各1.5m、高さ2.1m、重さ80kg。キャスター付きで、容易に移動できる。中心的に開発に携わった機械工学科の浅川拓克准教授によると、費用は材料費のみ50万円程度で、「市販品の約半額」という。

9日は同大で記者会見と同病院への寄贈式が行われ、坂本学長は「八戸工業大学の『知の結集体』。今後、後にも多くの人の健康を守るべく地域に貢献していきたい」とあいさつ。今院長は「感染症と闘う医療現場にとって心強く、安心。ボックスを活用し、安全で素早い検査を市民に提供できれば」と述べた。

今後は新型コロナウイルスの第2波や秋頃に流行が予想され